近畿中学総体（8/7･8 万博）RESULTS

＜女子の部＞
2年女子100m　山本　祐莉　12：64（+2．5）
　＜準決勝＞　12：62（+2．0）＜決勝＞　12：66（+1．7）5位
3年女子100m　西尾　香穂　12：66（−1．1）
　＜準決勝＞　12：38（+0．8）＜決勝＞　12：22（+2．0）3位
共通女子1500m　前田　梨乃　4：38：14　7位
共通女子4×100mR（金子里穂・山本祐莉・立石万貴・西尾香穂）49：25
　＜決勝＞　（金子里穂・山本祐莉・立石万貴・西尾香穂）49：01　1位
＜女子学校対校の部＞
1位　橿原（奈良）24点　**2位　東雲（大阪）20点**　3位　播磨南（兵庫）17点

東雲2連覇ならずとも、近畿総合2位！

女子リレーも貫禄の優勝！いざ！全国の頂（いただき）へ!!

地元大阪、東雲中学校にとってはホームグランドとも言える万博記念陸上競技場で開かれた第61回近畿中学校総合体育大会。夏真っ盛りの炎天下の中、大会新記録が6種目とレベルの高い近畿ブロックの面目躍如となり、おおいに盛り上がった大会となりました。

大会最終日。いよいよこの大会もクライマックスを迎える。14時15分共通男子1500m決勝、14時25分共通女子1500m決勝、14時35分共通男子800m決勝、14時45分共通男子3000m決勝と、大阪の代表選手3人がどの種目にも入賞するという快挙で悲願の『打倒！兵庫!!』に向けて、バックスタンドに陣取る大阪の大応援団の雰囲気も最高潮に達しました。残すは男女それぞれの4×100mリレーの決勝のみ。この決勝にも男女それぞれ大阪の3チームが残っている。「おおさか～」「しののめ～」などの大コールや拍手があり、その声援の大きさは本部席前にいる自分の胸に響くほどになる。奈良や京都の集団応援もあり、さながら応援合戦の雰囲気になる。この大声援の中、リレーができる選手は幸せ者であると強く感じたものです。

東雲の選手権で出した48秒28は、今シーズンの日本中学ランキング1位。歴代中学8位という大記録で、プログラムに掲載されている出場ランキングでも断トツの1位となる。そればかりではない。2位に咲くやこの花48秒94（日本中学ランキング7位）、3位登美丘49秒01（同8位）と、大阪のチームがワンツースリーを独占している。自分の記憶では、大阪のチームが上位3チームを独占したことは過去に一度もない。東雲は近畿大

会の大会記録、４８秒６８（１９９８年、兵庫宝殿中：この年全中でも優勝している。）の更新も視野に入る。東雲が勝つのが当然のように感じていた人がいたかも知れない。

実はそんな東雲に不安要素がひとつあったのだ。第２走者の山本祐莉が２日の万博ナイターの次の日から３９度の熱を出して３日間寝こんでしまったのだ。大会初日の朝の練習にやってきて何とか調整練習をしたものの、大事を取ってすぐに帰らせた。２日目。最初からわかっていたことだが、祐莉には試練が待ち受けていた。１０時２０分から１５時０５分までの４時間４５分のあいだに。リレーの予選、決勝、２年女子１００mの予選、準決勝、決勝と５本のレースをこなす強行日程となっていたのだ。体調が万全であっても、きつい日程であるのに、病み上がりの体では無理があると思い、場合によっては１００mを途中で棄権させようかと迷っていたくらいである。朝１番のリレーの予選では案の定、祐莉の本来の走りではなく、４走の西尾にバトンが渡ったときはひとつ内側のレーンの滋賀の瀬田北に次いで２番手。しかも３mほど差をつけられているのだ。「（今シーズン初めて）負けた？！」と思ったのも束の間、西尾はホームストレートをダイナミックなストライドで駆け抜けて、フィニッシュライン手前で追い抜いてしまったのだ。１着東雲４９秒２５、２着瀬田北４９秒４２．結局、この２チームが予選全体でも１位、２位となり、順当に決勝進出を決めた。後になって後で聞いた話であるが、リレーチームは前日から「（私達は）負けるはずがない、絶対に勝つはずだ。」と明言していたそうだ。

一瞬の静寂のあと、号砲が鳴った。耳をつんざく大声援である。金子はいつものピッチ走法で曲走路を駆け抜けて、第２走者の祐莉へバトンパス。ここまで来ると、（自分が）５本目のレースであるなんて考えている暇はない。バトンを受け取ると、本能のままに祐莉がバックストレートを疾走する。バトンは第３走者の立石へ。立石も大きなストライドで競り合いながら曲走路を駆け抜ける。第４コーナーにさしかかって、「は～い～」の大きな声が次々にこだまする。４レーンの瀬田北がトップ。続いて５レーンの奈良の橿原、そして東雲。近畿の決勝に残るリレーチームのアンカーは、誰もが認める実力のあるスプリンターばかり。その選手を西尾は狙いを定めたハンターのように、次々と追い抜いてフィニッシュ。１着、東雲４９秒０１、２着、瀬田北４９秒１８、３着、橿原４９秒３０･･･。何と７着の咲くやこの花の４９秒８５まで７チームが４９秒台。史上最高レベルの女子リレーの決勝となった。スタンドからは「いいぞ！いいぞ！おおさか～!!」「しののめ！おめでとう!!」の大声援。これまたすごい迫力であった。

笑顔で表彰台に上る４人。近畿のリレーのチャンピオンチームとして、千

葉の全中に乗りこむことになる。それでも、まだ通過点。東雲らしく、明るく元気にバトンをつないでいきたい。２２日（水）１５時３０分、全国大会決勝が終わるまでは、一喜一憂することなく、平常心でそのときを迎えたい。

西尾香穂、１２秒２２の大記録で３位入賞！

ジュニアオリンピック出場も決める!!

大会初日。３年女子１００m。出場者のシーズンベストのランキングで言えば、１２秒３９の西尾は４位。１位は同じ大阪の芝谷中の川崎選手で１２秒１５、２位は京都の大住中の西村選手で１２秒１７，３位には兵庫の龍野東中の清水選手で１２秒２８となる。３位入賞とベスト記録更新を視野に入れたレースとなる。近畿２府４県から上位３名しか出場できないので、どの種目も出場者はたったの１８名。それなのに、予選を各組６名にして３組。各組３着プラス３で１２名は準決勝進出。その準決勝も６名で走り、各組３着プラス２で決勝をおこなうという真綿で首を絞めるようなラウンドとなる。次の日のリレーも考えて、予選は着取りを意識して流すように指示した。３組４レーンに西尾、５レーンに龍野東の清水選手。向かい風１，１mの悪条件の中でも西尾は貫禄のレース、フィニッシュライン手前で流して１００分の１秒差の２着、１２秒６５と申し分のないレースで準決勝進出を決めたのである。準決勝は２組。今度は京都の大住中の西村選手と同組になる。追い風０．８mの中、１着が西村選手で１２秒２３、２着が１２秒３８で西尾。西尾は１００分の１秒自己記録を更新したことになる。こうなると、決勝ではジュニアオリンピック参加標準記録の１２秒３０の突破も狙いたい。ベンチに帰ってアイシングをした後、西尾はほとんどノーアップで決勝レースを迎えることになる。

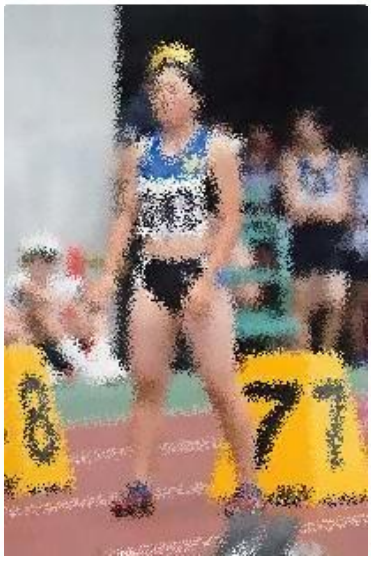
１５時３５分。３年女子１００m決勝。３レーン西尾、４レーン清水選手、５レーン川崎選手、６レーンに西村選手。ダッシュを１本入れたあと、選手は衣類運搬係に自分の荷物をあずける。ファンファーレが鳴り、近畿の最速スプリンター女王を決めるクライマックスを迎える。レーン紹介のときに西尾が手を挙げると、大阪ベンチから「かほー！」と大きな声。この決勝レースにも３人の大阪の選手が残っているので、「おおさか～」の声が３度鳴り響く。

「ON　YOUR　MARKS」のスターターのコールがかかると、今度は場内指令の補助員が「スタートのときはお静かにお願いします」と書かれた看板をいっせいにホームスタンドに掲げる。「SET」スタジアムが一瞬、息を呑んだように感じた。ピストルの閃光とともに、選ばれし８人の走者がきれいにスタートを切った。シードレーンの４人を頂点にする

ようにフィニッシュラインを駆け抜けた。１着は川崎選手。速報のデジタルタイマーは『１２：０５』で止まる。大歓声があがった。彼女自身が持つ１２秒１５の大阪中学タイ記録を更新する大阪中学新記録。風もプラス２．０ｍと表示され、公認記録である。「おめでとう！」も拍手の中、まもなく正式にリザルツが発表された。２着西村選手１２秒１９、３着西尾１２秒２２。西尾はもちろん自己ベスト。ジュニアオリンピックの出場も併せて決めたことになる。８着の瓜破の松尾選手まで１２秒６７。これまた、近畿大会史上最速の女子１００ｍのレースであるように思う。表彰の控え室に来た西尾に声をかけると、「がんばりました。よかったです。」と、にこにこ笑顔である。表彰式が終わって「また、全中の決勝でこの３人で会いましょう！」と、言うと「はい！」３人とも笑って答えてくれた。このレースで西尾の１００ｍの入賞がより明確な目標になったように思う。

山本祐莉、２年女子１００ｍで６位入賞！

この借りはジュニアオリンピックで返せ!!



先に述べたとおり、不安要素を抱えながら１日５本のレースに臨むことになった山本祐莉。リレーの予選が終わるとすぐに、２年女子１００ｍ予選のコールを受けるために、選手招集場所へ向かう。福島と山元が氷を持参して、その入り口当たりで待ち構える段取りとなっていた。指導者も選手も今、目の前にあるレースに集中することが一番大切であることは心の中で了解ずみで、不安要素のことはまったく触れずにいた。予選のレースは西尾と同じ。着取りを狙って流すこともありという戦略であった。追い風２．５ｍの中、気持ち良さそうに２着、１２秒６４で駆け抜ける。「これで、体が本来の走りを思い出してくれるはずだよ」と、声を駆け抜けると、祐莉もまた「はい！」と力強く返事をしてにこにこ笑っている。迎えた準決勝。祐莉は２組。同じ組の兵庫の２人、朝日中の横田選手と宝殿中の藤原選手はともに１２秒５０でランキング３位。全国大会参加標準記録を突破して全国大会出場を決めている選手である。対する祐莉は１２秒６０が自己ベストでランキングは６位である。準決勝も着取りを意識した走りになり、追い風２．０ｍの中、１着横田選手１２秒５７、２着藤原選手１２秒５８、３着が祐莉で１２

秒６２。確実に決勝進出を決めている。祐莉は昨年のこの大会の１年１００mで２位、ジュニアオリンピックで６位の選手である。ケガ続きで思うように練習ができなかったが、ようやく夏に間に合わせた。病み上がりとはいえ、意地があるはずである。１２秒５０のジュニアオリンピック参加標準記録突破も視野にいれて、気合いで何とかこの難局を乗り越える力を持っている。ここ一番の集中力は、天性のものを持っている選手である。

いよいよ運命の４本目のレースを迎えた。１３時５０分。２年女子１００m決勝。６レーンにランキング１位の京都、岡崎中の吉田選手。５レーンは同じ京都、東宇治の岡田瑠依選手。実は彼女はこの春まで大阪の玉手中にいた選手。ジュニアオリンピックリレーの補欠選手としていっしょに横浜に帯同したときには、東雲の選手といっしょに行動していた馴染みのある選手である。彼女のベスト記録は１２秒４２で、全国大会の出場も決めている。４レーンに藤原選手、７レーンに祐莉、その隣の８レーンには咲くやこの花の寄田選手である。スタブロをセットする選手に、じりじりと夏の強い陽射しが照りつける。タータンの上は４０度近い。「ON　YOUR　MARKS」のコールの前には、選手は氷水が入ったバケツに手を突っこんでからクラウチングスタートの姿勢をとることになる。

スターターのピストルが鳴った。好スタートを切るが、前に出られない。横一線である。中盤あたりから祐莉がわずかに遅れ出す。１着でフィニッシュしたのは吉田選手で１２秒２８。追い風１．７mの好条件とは言え、すばらしい記録である。祐莉は５着。１２秒６６。病み上がりで疲労困憊の中の４本目のレースが終わった。悲しんでばかりはいられない。１時間１５分後の共通女子リレー決勝のレースに気持ちを切り替えて集中しなければならない。リレーメンバーをはるということは、そういう宿命なのだ。

前田梨乃、自己新記録で１５００m７位入賞！

１４時２５分。共通女子１５００m決勝がスタートした。近畿２府４県の３位以内の選手１８名が一発決勝で勝者を決めるのだ。大阪府代表は前年度全中チャンピオンの髙松望ムセンビ選手。その妹の髙松智美ムセンビ選手、そして前田。ランキング表を見ると。兵庫の３人、京都の２人、そしてムセンビ姉妹が上位で、前田はランキング８位の選手となる。東雲総合優勝のために、下位入賞はぜひとも果たしたい。前田はいつもの積極的なレース展開である。望ムセンビ選手が先頭グループを引き離すが、先頭グループが決して自重しているわけではない。４００mを６８秒あたり、８００mを２分２５秒あたりで通過して、いよいよラスト１周の鐘が鳴った。前田は７位争いを演じているが、８位の選手もすぐ後ろにいる。２～３m前には６位の選手。前田は疲れた体にむちを打ってスパートするが、府県代表になる選手はそう簡単にスピードを落とさない。それでも前田の足はあきらめていない。ラスト１００mの直線に入った。目まぐるしく

変わる速報のデジタルタイマーがうらめしい。７位でフィニッシュ。４分３８秒１４は１００分の６０秒ではあるが、自己記録更新。この一番大きな舞台でベストタイムを出したことは立派である。前田も全身玉の汗であるが笑顔である。東雲総合優勝に向けて、わずかに望みをつなぐ走りである。東雲中陸上部の歴史に残る女子中長パート初の近畿大会入賞を成し遂げたのである。

みんなでがんばった近畿大会！お疲れ様でした!!

閉会式が始まった。府県別対抗で大阪は今年も兵庫に敗れた。男子総合２位、女子総合２位、男女総合２位であるが、その得点差は例年になく近づいている。地元大阪の意地を見せたことになる。学校対校は男子は咲くやこの花の３連覇、女子は奈良の橿原が初優勝、東雲は準優勝で連覇ならず。橿原中は６月に東雲中の練習に参加していただいた学校。顧問の野口先生に電話で依頼を受けたときに「そんな（強豪校に練習にきてもらえるような）学校ではない。」とお断りしていたのですが、雨にもかかわらず野口先生と共通女子リレーメンバーがやって来ました。その礼儀正しさときびきびした動きに、あらためて恐縮したものです。近畿総合優勝にふさわしい素晴らしい学校だと思い、表彰式では心から拍手を贈りました。

地元大阪で開かれた近畿大会。東雲中の部員は早朝からの前日準備、当日の補助員、片付け、清掃に至るまでよくがんばりました。おそろいのＴシャツを支給されて、この大会が大きな大会であることをさぞかし実感したことでしょう。衣類運搬係をつとめた松虫中と柴島中の生徒の動きには脱帽です。選手紹介の前に選手がレーンボックスの後ろに置かれているかごに衣類を入れる。その衣類を持って駆け足でゴール付近に移動する仕事は、本当に大変そうでした。みんな必死です。いつ見ても一生懸命です。その理由はみんな陸上競技が大好きだから。そのひと言に尽きるはずです。体もまだ小さく、その走りも目を見張る動きがあるわけではないが、１～２年後には立派なアスリートになってこの夢舞台で活躍する選手が出てくるはずだと思うと、何だかとっても嬉しくなってしまうのだ。陸上競技はやっぱりすごいです。